
街の仕事屋さん + いろいろ。

三味線乃介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街の仕事屋さん＋いろいろ。

【Nコード】

N2306BA

【作者名】

三味線乃介

【あらすじ】

古風な街の仕事人と、愉快的仲間たちの物語。

000 除霊がしたかったです

ぼろぼろに崩れた赤煉瓦と、色あせた茶色の屋根を持つ館。体育館ほどの大きさが、不気味さをより一層引き立てる。

かつて英国貴族でも住んでいたと言われれば、嘘にはならない。けれども、そんな栄華は一片も残っていないかった。

「おいおい、こんなところで仕事をするのかい？ 御免だね」

俺はわざと冷ややかに言った。仕事がしたくない訳では無かったが。

「まあそこを頼みますよ、夜上^{やかみ}さん」

神父の服を着た男は、甘ったるい口調で答えた。話し方がムカつく。

大体なんで聖職者たる者が除霊もできないんですか、と言おうとしたが、その必要は無かった。

「あの霊、ちょっと強いんだよ。ね、お金はいくらでも出すからさ」

聖職者になっても金か、腐ってるぜ。

だが仕事が無くなつては困る。

「……分かったよ」

俺はしぶしぶ了承したように言った。

「ありがとう！ じゃ、健闘を祈るよ」

腐れ聖職者は何かを隠すように、走って、どこかへ言ってしまった。

おいおい、お札も持たないで大丈夫なのかよ？ 大体、除霊っていつでも何すりゃいいんだよ？

疑問はもう解消できなかった。あいつ、逃げ足だけは速いな。

俺は舌打ちしてから、館と呼ぶにはあまりにも情けない廃墟に、足を踏み入れた。

俺は、夜上リュウヤ。

某国際都市の片隅で仕事人をしている。

仕事人といっても、人殺しをしている訳ではなく、犬の散歩をしたり、解体屋の手伝いをしたりしている。街の便利屋と言ったところだろうな。

除霊は何度もしたことがある。ただ、お札も持たず、除霊の手順もうろ覚えなのはこれが初めてだ。

懐中電灯だけで除霊ができるなら、観光客でもできるじゃないか。それを俺に頼むほどの理由があるのか？

まあいいや、この不景氣にいい仕事が出来たもんだぜ。

それにしても不気味だ。西洋人はこんなものに神秘を感じるのか？
今も昔も埃だらけだったんだろうな。

廊下も無駄に長い。そのうえ赤絨毯が敷いてあるが、高貴な気分にはならない。

何も出なかつたらそれはそれで問題だがな。

聖職者が幽霊を何かと見間違えたんだったら、もう笑い話だ。

ははは、と大きな声で笑ってみた。

声が廊下中にこだまするだけで、返事はない。

さつきからドアを開けたり閉めたり単純作業が続いている。

飽きてきたが、ただで帰るわけにはいかない。

……そうだ。

出てこないなら呼び出せばいいじゃないか。

俺は木製のドアを開けて、部屋に入った。

召使いの部屋だろうか。いつかの高貴な館にしては、随分と小さな部屋だ。

埃を被った本棚には、年季のある本が揃っている。

その中に申し訳なさそうに置かれた、黒いインクの入った瓶。

テーブルの上には、先端が黒ずんだ羽ペンが寂しそうに置かれていた。

椅子に座って、ペンを握ってみる。なんとかかなりそうだな。

次いで本棚から緑表紙の本を取り出した。

それから適当なページを開いて、破り取った。にじみそうだな。

最後に、インクを取って、瓶の蓋を開けた。勢い余って少しこぼしてしまった。

ペンの先をインクに浸した。そして、一気にアルファベットを書き上げた。

日本人に習った「こつくりさん」をやる時が来たようだ。まさかこんな所でやるとは思ってもいなかったが。

硬貨は……無いな。ペンでもいいだろうか？

ペンの先を鳥居というシンボルの上に乗せて、静かに言った。

「こつくりさん、こつくりさん、どうぞおいでください。もしおいでになられましたら『はい』へお進みください」

反応しない。もう一度、言った。

「こつくりさん、こつくりさん……」

そこまで言いいかけたところ、いきなりペンが動き出し、「はい」へ向かって動き出した。

驚いた。マジでなるのかよ。

しかし驚いてばかりもいられないので、次の質問に進むことにした。

「鳥居にお戻りください」と言うと、ペンはゆっくりと鳥居に向かって動き、止まった。

「こつくりさん、こつくりさん、この館で怪奇現象が起こっていることをご存知ですか」

ゆっくりと「はい」。女性の声が聞こえた。

思わずペンを投げ捨て、声がしたほうを向いた。

こつくりさんの途中で持っているものを放してはいけないそうだが、関係ない。

そこに居たのは、真っ白な女性の幽霊だったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306ba/>

街の仕事屋さん+いろいろ。

2012年1月5日21時46分発行